

## 編集後記

### 編集長(ダン シロウ)

★今号から新連載の柳たかを氏は、四〇年近い友人の漫画家だ。漫画家集団「ぼむ」の月例会で延々と出合い続けているメンバーの一人。

平成が四半世紀以上過ぎた現在、昭和の団塊世代はとっとと退場願いたいと、若い世代から追いつられていそうだが、昭和には良いものもたくさんあった。東南アジアの国々の下町に行くと、懐かしさいっぱいになる世代の私にとって、あの時代も又、記憶に残し、伝えるべきことは記録しておきたい気がする。

そんな思いにピッタリの素材を、彼がかつて描き続けていたのを思い出した。ローカルがグローバルに繋がっていると言うが、本当にそう思える体験をこのマンガで楽しんで貰いたい。

★「猫」の連載が今号で中断する。以前にも類似のことがあったが、組織に属して活動することと、個人として発言することとの折り合いは簡単ではない。無理を強いるのではなく、成長して、適正発信のデザインも考えられるキャリアを身につけて再開されると良いなと思う。

★楽しんで購読していた文芸誌「エンタクシー」が休刊になった。月刊「クーリエジャポン」も来年二月号で、印刷誌の寿命は終えて、デジタル コンテンツ有料配信誌になる。愛読誌が消えてしまうのは、思いがけず自分より若い知人が亡くなったことを耳にした時にも似て無常感が漂う。

何事も永遠ではないのは分かっているはずだが、つい勘違いして日常を過ごしていることに気付かされる。やりたいことは今しておこう。

会いたい人には、今会っておこう。無常はお互い様だからね。

### 編集員(チバ アキオ)

子どもといると話しかけられる。「何歳?」「頑張ってる歩いているね!」「ばいばーい!」自然と会話が始まる。おじいちゃん、おばあちゃんも話しかけてくる。若い世代も「かわいい!」と声をかけてくる。同世代でも同じところで遊んでいると会話が始まる。子どもが生む良循環な流れは自然とはじまる◆子どもの声が騒音!と市街地での子どもが集まる施設が苦情に対処している。京都にも子どもが利用する基幹となる福祉施設において、子ども用のスペースを作ったけれども近隣からの苦情が…ときく。自分が勤めるところでも子どもの遊べる屋外のスペースとして設計された場所は結局一度も使われず12年が過ぎている◆3Sを徹底して実践している企業への見学研修に行く機会があった。鉄を扱うその会社では作業での「騒音」はつきもの。周りは住宅地。それでも、過去にはあった苦情が現在はないそうだ。そのきっかけになっていることが2つあるそうだ。一つ目は近隣地域の清掃である。週に2回どんな繁忙期でも実施している。現在ではお礼の声をかけられたり、お礼の手紙が届いたり。そして、清掃の範囲を少しずつ広げているそうだ。二つ目は徹底した防音・断熱対策である。そのために建物を改装したことだそうだ。もちろん2重サッシを採用。リーマンショックの仕事がない時期に借金をしてでも社員に仕事を与えるために自前でしたそうだ。仕事がないなら、自分たちで作り、社員の首を切らずに堪えたそうだ◆北欧では保育所等の新規設立にも反対運動は少ないという話を聞いた。その一因に厳しい寒さ対策の家づくりがベースにあるそうだ。断熱効果の狙った建物はそのま

ま同時に防音効果にもつながるのである◆私が引っ越して間もないころ隣の家のおばあちゃんに声をかけられた「なるほど、通りでにぎやかな声がするわけだ」といわれた。私は「うるさいですね、すみません」と謝った。するとそのかたは困った表情をされて「…そういう意味じゃないのよ、にぎやかで元気が出るわよ」とにこり。一瞬、その方の表情を曇らせてしまったことをしてしまい申し訳なかったことをよく覚えている◆正しい答えがあるわけではない。けれども、先日伺った研修でのお話を思い出した。ルールでこうしてください！ではなく、ひとつひとつの案件に関わっていく。その中で、何か違う状況を生むことが可能になることがある、そう私は受け取ったお話だった◆何に関して骨を折り、何に関して骨惜しみをするのか？どちらを向いて仕事をしているかでおのずと決まってくるだろう。対人援助学マガジン自体がどちらを向いているのか？それは明快であり、一つだけではなく、でもそれらの方向性は同じであるように編集をしながら思う。

### 編集員 オオタニタカシ

早いもので、もう 23 号です。10 号から編集員に加わりましたので、関わってからの期間の方が長くなりました。創刊からはまもなく 6 年。ひとつのことを続けることはそう容易ではありませんが、今のところこのマガジンが続けられなくなる要素は見当たりません。打ち切りの心配がない中、今後どう続けていくのか、新しい試みや展開にも思いを向けられるのが、なんだか贅沢です。個人的に、面白そう、やってみたいと思っている企画が 2 つあります。

1 つは前に一度やった「対談」です。多彩な執筆者がいるマガジンですから、執筆者同士が出会うことで起こる化学反応への期待があります。また、執筆、編集、発行が全て Web で完結しているマガジンで、あえて対面の場を持つ、あえてアナログに対話することの意義も

あるのではないかと考えています。ただ、それぞれお忙しく、お住まいも日本各地に渡る執筆者陣ですので、対談の設定が目下一番のハードルです。でも、またやりたいです。

もう 1 つは「リレー連載」です。ある特定のテーマについて、毎号どなたかに、自分が思うことを書いてもらうという企画です。多様なテーマが取り上げられているマガジンですが、あえて共通のテーマを設けることで共通する部分や特異性が浮かび上がって面白いのではないかと発想しました。単純に、「あの人にこのテーマで話をしてほしい！」という動機もあります。ただ、みなさん通常の連載を抱えておられるので、負担としてどうなのかな…というのが踏み出せない理由の 1 つです。

考えたことが形になるのかならないのか。そこはそれほどこだわってはならず、必要なものは適当な機会に形になるのだろうと気長に考えています。

### ■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

[danufufu@osk.3web.ne.jp](mailto:danufufu@osk.3web.ne.jp)

### マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町4 3 8

ランプラス二条御幸町4 0 2 仕事場D・A・N

## 対人援助学マガジン

### 通巻23号

第6巻 第三号

2015年12月15日発行

<http://humanservices.jp/>

第24号は2016年3月15日

発刊の予定です。

原稿締切2016年2月25日！

新規執筆者を常に募っています。連載誌ですが、必ず何回以上と決めているわけではありません。必要な回数、書いていただけるよう設定しています。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

### 対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町 56-1  
立命館大学大学院応用人間科学研究科内  
TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

### 対人援助学会事務担当

### 入会・退会・変更届

〒540-0021 大阪市中央区大手通 2-4-1  
リファレンス内  
TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

## 表紙の言葉

ある月刊誌に一年間、映画のイメージイラストを描いて、それに短文を付ける仕事をしていた。

映画は趣味だから、楽しい仕事だった。掲載がカラーというのでモチベーションが上がった。新聞ではなかなかカラー漫画など載せてもらえない頃で嬉しかった。

評判がどうだったかさっぱり分からないが、ややマニアックな映画の選択になったのは、若気の至り。

一年できっちり終わってしまった理由はそれかもしれないと気がつくのは、随分後のことだ。

ちなみに、このイラストの映画だが、全く思い出せない。それくらいマニアックだった。いやいや、覚えてないんじゃない。

2015/12/5 団士郎